

## ESD の視点を取り入れた社会科授業の開発

B2E12044 樋口 紘平

### はじめに

本論の目的は、小学校高学年社会科において、ESD の視点を用い環境学習の授業プランを開発することである。

今日の社会は、地球温暖化や酸性雨などの環境問題、人権侵害や異文化衝突といった社会的問題、貧富格差をはじめとする経済的な問題など、様々な課題に直面している。とりわけ、これまでの大量生産・大量消費を中心に据えた「開発」は、ごみや公害により環境を悪化させ、地球資源の乱用により自然界の秩序を乱すばかりか、地域社会の荒廃を招き、さらには他の地域の貧困化を推し進めるなど、深刻な問題を引き起こしている。そこで、その問題を解決するために持続可能な発展のための教育 (Education for Sustainable Development : 以下 ESD と略記する) が重要視されている。

小学校学習指導要領によると、小学校社会科では、持続可能な社会の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して、新たに必要となる内容を加えたり、内容の再構成を図ったりすることが求められている。

ESD は、「環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点から、より質の高い生活を次世代も含むすべての人々にもたらす事のできる開発や発展を目指した教育であり、持続可能な未来や社会の構築のために行動出来る人の育成」を目標としている。これは、小学校社会科で重視されている、よりよい社会の形成に参画することに合致している。前田俊二<sup>1</sup>は、2008 年の小学校社会学習指導要領をみたとき、各学年の目標と内容には、「持続可能性」や「持続可能な社会」といった語句は見られないが、1998 年版の小学校社会学習指導要領と比較するなら、第三学年及び第四学年の目標・内容記述に「良好な生活環境」や「節水や節電などの資源の有効な活用」という新たな語句が出現したこと、第五学年では「国土の様子」と「環境」が目標の第一に示されたこと、この目標の中に「自然災害の防止」という語句が付け加わっていることを論拠にして、2008 年版に ESD の精神が反映されているとしている。

筆者はこうした社会動向及び学習指導要領の変化を踏まえて、社会科の学習に ESD の視点を取り入れた授業を開発する必要があると考え、これを本論の目的に掲げた。

この開発授業プランによって、筆者が児童に身に付けさせたい力は、次の三つである。

- ・一人ひとりが人間と環境とのかかわりについて理解を深め、豊かな自然の大切さについて認識を高め、環境を大切にすることを心を持つこと。
- ・そうした認識や価値観をもとに、環境に配慮した生活や責任ある行動をとること。
- ・環境問題を引き起こしている社会経済の背景や仕組みを理解することにより、社会経済の構造を環境に配慮した持続可能なものへと変革していこうとする態度を培うこと。

そのために、必要な能力として、三つ挙げられる。一つは、社会に参加・参画する態度を身に付けること。二つは、環境問題について、経済・社会・歴史・文化・環境の視点から捉え、本質を理解すること。最後に、生きる力を身に付けることである。生きる力とは、課題を見つけ、自ら学び、主体的に行

---

<sup>1</sup>前田俊二 2009 『小学校社会科における ESD—新学習指導要領からの検討—』地理教育における ESD カリキュラム開発の総合的研究。

動し、よりよく問題を解決する資質や能力を指す。

では、どのようにESDの視点を取り入れていくのか。それを説明するために、従来のESD教育について述べた上で筆者が目指す授業について考えていく。

従来開発されたESDの学習では、「生き物をまもろう」や「環境を守ろう」のような環境の視点のみでしか物事を捉えていないものが多かった。また、授業の終末部においても、学習者にとっては今後の自分とその単元で学習した事柄との関わりが見えにくいというものがほとんどであった。そのために答えが建前的なもので終わってしまいかねず、児童の参加行動も現実性・継続性に欠けるものになりかねない。

そこで、松浦雄大<sup>2</sup>の「批判的消費者学習」の視点を取り入れ、環境問題を広い視点で捉えることや、単元が終わった後でも関わりが見えるものにしていく。松浦の考える、ESD学習の要点は次のようなものである。

①能動的な参加から批判的な参加へ

②生産・開発の問題に行政官・経営者の立場だけではなく消費者の立場でも参加する。

自らの活動・行動を対象化させ、「どうして参加しなければいけないのか」、「参加した結果、どうなるのか」を冷静に省察させたうえで、活動・行動を決断させる「批判的な参加学習」が求められている。すなわち、「活動・行動を基盤にしたESDの授業実践」から、教科の固有性を意識した「認識を基盤にしたESDの授業実践」へ変革する必要があるということである。

普段の児童から乖離した立場で、生産・問題を考える場合、今後の自分との関わりが見えにくいために答えが建前に終始しかねず、児童の参加行動も現実性・継続性に欠けるものになりかねない。なので、児童には「私たちは普段の生活で、どのようなことを考えて参加すべきか。」を意識させるためにも、児童が現実継続的に、必ず社会とかわかっていくであろう「消費者」の立場を含めて、生産と開発の在り方を考える必要がある。

環境について学ばせたいから環境のテーマを選択するのではなく、現在、そして、将来の児童の実態を意識して学習内容を選択している。「環境、経済、社会、国際理解」のテーマを考えると、中心にいるのは人間である。環境を悪化させているのも、経済を動かしているのも、多様な世界について理解するのも人間である。だから、児童を誰もが経験するような特定の立場に立たせることで、よりESDへの理解も深まると考える。どのような社会で生活しようと、多くの児童は「消費者」という立場を経験する。よって、その立場から、経済、環境、社会、国際理解など学際的な内容へアプローチしていくことで、多面的・多角的な見方で社会に迫り、追究することが出来ることが考えられる。

しかし、松浦の「消費者批判学習」では、社会に参加する態度を養うことはできるが、実際に行動するととなると、自分で実現できることのみで留まってしまう。社会事象に対して自分だけではできないことをどうするのかも考える視点を取り入れなければ、持続可能な社会の実現は難しい。

そこで、社会参加について、自分の出来ることを行うことに留まってしまうことについては、吉田<sup>3</sup>の社会参画学習の視点を取り入れる。どのような視点か、以下のように述べている。

---

<sup>2</sup> 松浦雄典 『ESDにおける批判的消費者学習としての社会科授業構成—小学校第5学年単元「自動車から見える世界、そして自分へ」を例に一』日本社会科教育学会 第64回全国研究大会。

<sup>3</sup> 吉田正生 『『社会問題科』としての『社会参画学習』、未発表、pp. 10-11

たとえば雪国に住む独居老人に対して、政府や自治体は何をすべきか・何が出来るか、ボランティアグループやNPO法人についてはどうか、企業はどうか、独居老人の(遠く離れて住んでいる)家族や親族はどういう具合に、後述する公・共・商・私の視点を踏まえ、それぞれの社会的役割から何をすべきか、また諸般の事情を勘定した場合、何が出来るかという具合にアクターを明確にした上でなすべきこと・出来ることを考えさせるべきである。

公・共・商・私の視点を取り入れることで、自分に出来ることを行うことに留まらず、自分に出来ないことはどうしたらよいかを考えることが出来る。また、多様な視点から環境教育を行う際、様々な人々の協力が必要である。そこで、この公・共・商・私の視点と、消費者の視点から環境問題を捉えていくことを行っていく。以下、筆者の考える授業実践を二つのポイントにまとめる。

①持続可能な社会の実現の為に、社会に参加・参画する態度を養い、自分に出来ることは何か、自分に出来ないことはどうするか考え、実行する児童を育成する。(公・共・商・私の視点)

②消費者の視点に立って、環境問題を多面的・多角的に捉えることが出来る児童を育成する。(消費者学習)

つまり、ESDの視点を取り入れている環境教育の先行研究である、「消費者批判学習」と、社会参加の視点である「社会参画学習」の2つを用いた授業プランを作成するということである。2つの視点を取り入れることによって、環境問題の本質を理解し、その改善の為に主体的・協同的に行動できる力を育成する環境教育が出来ると筆者は考える。

そこで、本論を次のように構成する。まず、環境教育の先行研究・授業実践を分析し、現在の環境教育の問題を指摘するとともに、ESDの先行研究・授業実践についても分析し、筆者の目指す授業モデルを明らかにしていく(第1章)。次に、環境教育・ESD教育の課題を乗り越えるものとして、「消費者批判学習」を取り上げ、その視点について述べる(第2章)。さらに、「社会参画学習」の視点について、説明し、「消費者批判学習」でどのように取り入れていくかについて述べる(第3章)。最後に、教材について述べ、ESDの視点を取り入れた環境教育の授業開発を行う(第4章)。

## 論文の構成

### はじめに

#### 第1章 社会科「環境学習」の授業分析

##### 第1節 環境学習の分析

##### 第2節 ESDについて

##### 第3節 筆者が目指す授業像

#### 第2章 消費者批判学習の視点について

##### 第1節 消費者批判学習の定義と意義

##### 第2節 消費者批判学習の授業構造

#### 第3章 社会参画学習について

##### 第1節 社会参画学習

##### 第2節 社会的役割

##### 第3節 本論における社会参画学習

## 第4章 ESDの視点を取り入れた環境教育の授業開発

第1節 本論の目指す授業モデル

第2節 教材について

第3節 インタビューについて

第4節 リサイクルについて

第5節 学習指導案

おわりに

### 第1章 社会科「環境学習」の授業分析

本章では、社会科における環境学習を取り扱った授業を分析し、問題点を明らかにした上で、本論の目指す授業像を明確にする。

… (中略) …

### 第3節 目指す授業像

ここまで、環境教育とESDの視点を取り入れた環境教育の先行実践を分析してきた。本節では、本論の目指すべき授業像について述べていく。

まず、第1節で、環境教育の問題点として、「A 環境問題を多面的に捉えているか」と「C 地域と一体になって環境の改善に努めることが出来ているか」の視点が十分ではないことを明らかにした。その問題点を乗り越えるものとして、第2節では、環境教育で重要視されている「ESD」について分析した。その結果、ESDの特徴である多面性・協力性などから、先行実践・授業実践はAとCを乗り越えているものが多く存在することが明らかになった。しかし、「C 地域と一体になって環境の改善に努めることが出来ているか」の視点では、確かに地域と協力しているが、協力している内容がインタビューを行ったり、話を聞いたりすることに留まっており、地域の人々の行動の変革には至っていないことも明らかになった。一部への行動の改善を行っているものはあるが、環境問題改善を達成できるものではなかった。

これらの分析を踏まえて、目指す環境教育の授業モデルを述べる。授業モデルとして2つの視点を取り入れたい。1つは第2節で分析したESDの視点である。その中でも松浦の消費者批判学習の視点を取り入れた授業開発を行っていく。第2節の分析の中で、Cの地域との協力が「△」であること以外乗り越えられている先行研究であり、また他の先行研究と比べ、どのような環境問題にも当てはめて扱うことが出来るため、この視点を取り入れた授業開発を行う。

2つ目は社会参画学習<sup>4</sup>の視点を取り入れることである。第1節、第2節の分析から、Cを満たすものがないことが分かった。地域との協力は、インタビューや講話を聞くという環境問題を理解する上での知識の注入に留まっていた。それだけでは、環境問題は改善せず、地域の人々の行動改善も行わなければ、地域が一体となって環境問題に取り組む事にはならない。そこで、「はじめに」で記述した吉田の社会参画学習の視点を取り入れ、地域の人々の行動改善を図りたい。

以上の2つの視点を取り入れた環境教育の授業づくりを行っていく。これらの視点を取り入れること

<sup>4</sup>吉田正生 『社会問題科』としての『社会参画学習』、未発表、pp. 10-11

で、筆者の目指す3つの視点を乗り越えた授業モデルが出来ると考える。第2章で消費者批判学習について整理し、第3章では吉田の社会参画学習の整理を行う。そして第4章で授業モデルを作成していく。

… (中略) …

## 第4章 小学校社会科環境教育の授業開発

### 第1節 本論の目指す授業モデル

筆者が求める三つの視点を満たす授業になるように、以下の2点を組み込んだ授業モデルを作成した。

- ①「消費者批判学習」を基に授業モデルを作成し、環境問題の原因を経済・社会・環境など広い視点から捉える力を育成し、「消費者」の視点に立つことで児童にとって身近で継続性のある授業内容にする。
- ②「社会参画学習」論の「公-共-商-私」の観点をを用いて、環境問題について考えさせ、地域が一体となるような授業内容にする。

上記に述べた2点を含んだ授業モデルを以下表4-1に示す。

松浦の「消費者批判学習」を取り扱う授業を参考にし、吉田の「社会参画学習」を取り入れた。その際に、筆者が求める三つの視点を「主な学習活動」の中に当てはめ、どのようにして従来の環境教育を乗り越えたのかを明らかにした。

表4-1 本論の目指す授業モデル(筆者作成)

吉田の「社会参画学習」	松浦の「消費者批判学習」	本論の目指す授業モデル	
		時	主な学習活動
(1)社会問題との出会い	(1)環境問題の把握 消費行動の問い直し	1	・越谷市では、たくさんのごみが出ていることを知る。 ・家庭のごみを調べて、どんなごみを出しているのか理解する。
		2~3	・ゴミ工場を見学し、どのようにゴミを処理しているのか、また越谷市のゴミの問題について話を聞く。
		4	・見学して分かったことをまとめて、発表をする。
		5	・ゴミが増えると、環境を破壊してしまうことを理解する。 「これからどんなことを考えて物を買うべきか」(学習課題)
	(2) ①個人の消費行動を促進させる仕組み	6	・どんなことを考えて物を買っているかを振り返る。 ・それらの消費行動の背景を知る。(大量消費・大量生産型社会、使い捨て商品の増加等) 「では、私たちは物を買うことが出来ないのかな」 A 環境問題を多面的に捉えているか

(2) 社会諸科学の知識習得	み	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境に良いリサイクル品・エコグッズを売って、6時の問題点を解決しようと「商」の立場が行っていることを知る。</li> <li>・本当にリサイクル品・エコグッズを買うことが環境に良いのか考える。</li> </ul> <p>A 環境問題を多面的に捉えているか</p>
	(3)自らの消費行動の決定	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴミ問題を解決するために、自分に出来ることを6時間目～7時間目の内容を踏まえて考える。</li> </ul> <p>→自分だけでは、ゴミ問題は解決できないことに気付く。</p>
		9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分に出来ないことをどうすれば良いか考える。</li> <li>・市の取り組みを知る。(「公」)</li> </ul>
		10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアの取り組みを知る。(「共」)</li> </ul>
		11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スーパーマーケットの取り組みを知る。(「商」)</li> </ul>
(3)行為選択		12~14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市の施設、ボランティア、スーパーマーケットの各グループに分かれて、ゴミ問題を解決するために何が出来るか・すべきかを考える。</li> <li>・それらの解決策が実現可能かどうか考える。</li> </ul> <p>C 地域と一体になって環境の改善に努めているか</p>
(4)行為選択の検証		15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの学習を踏まえて、これから、どのような事を考えて物を買うべきか考える。</li> </ul> <p>B 環境問題を改善するために、知識を得るだけに留まらず、自分に出来る事を行っているか</p>

(1)の「社会問題との出会い」、「環境問題の把握、消費行動の問い直し」では、家庭で出るごみを事前に調べることや、越谷市のごみの量について把握させ、子どもたちにごみに関する興味・関心を持たせる。そこで、ごみについて知りたいことをあらかじめ考えさせた上で、ごみ工場を見学する。ごみ工場での見学では、そこで働いている人に質問をしたり、話を聞いたりすることで、ごみに関する理解を深める。また、ごみが増えることで、環境が悪化してしまうことを理解させ、自分に出来ることはないか、考えていく。

(2)の「社会諸科学の知識習得」、「個人の消費行動を促進する仕組み、社会による消費行動の意図せざる結果」では、児童に自分自身の消費行動を見直させる。児童は消費行動を見直す中で、消費行動の背景を知っていく(社会的、経済的背景の理解)。そして、「普段、どのようなことを考えて物を買うべきか」、「環境に良いものを買う時にどのような事を考える必要があるか」という二つの消費行動を見直し、今・ここで児童に出来る環境に良い行動を考えていく。その中で、それだけではごみ問題は解決できない事を知り、「公―共―商」の立場の人の取り組みを知る。また、抱えている問題についても理解する。

(3)の「行為選択」では、「公」「共」「商」の三つの立場に分かれ、(2)で見つけた、それぞれの立場が抱える問題について、それを解決するためにそれぞれの立場は何が出来るのかを考えていく。その際に、考えた解決策が実現可能な物かどうか、考える活動も行う。

(4)の「行為選択の検証」では、今までの学習を踏まえ、もう一度、ごみ問題を解決するために自分に出来ることを考える。まとめでは、実際にお店で物を買ってみて、その時にどんなことを考えて物を買ったかを発表することや、(3)で考えた「公」「共」「商」の改善策を提案することを行う。